

# 皇居開放と再建

——「国民」と天皇との関係をめぐって（下）

森 暢 平

## III 皇居造宮審議会の議論

皇居造宮の予備調査は一九五八年度までの二年間で実施された。宮内庁は内田祥三東大名誉教授ら建築の専門家四人を顧問に任命し、宮殿と御所の基礎的な設計を含んだ「新皇居の構想試案」<sup>(2)</sup>をまとめた。明治宮殿の跡地（西の丸）に七〇九〇坪の新しい宮殿を建設し、御所は御文庫に隣接して四五〇坪の二階建てを建設する宮内庁原案である<sup>(3)</sup>。新宮殿が七一―八五億円、天皇の住居が一億八〇〇〇万円の経費が見込まれていた<sup>(4)</sup>。一方、予備調査が行われている二年間は、皇居開放の議論が皇太子の婚約発表、東京の交

通事情の悪化を背景に盛りあがった時期でもあった。敗戦直後からの開放論が、新たな装いで再登場するのである。そのため、「新皇居の構想試案」には、「清らかで力強い宮殿建築の伝統と旧宮殿の良さを活用」とする文言と、「国民に親しまれる現代の代表的建築とする」という語句が並置されている<sup>(5)</sup>。つまり、〈皇室の権威と伝統を表象する皇居／宮殿〉と〈皇室と国民との距離を縮めるための皇居／宮殿〉という二つの目的を同時に達成する必要性が認識されていたのである。そして、「国民の関心事」である皇居造営について「広く各界有識者の意見を聞いて十分研究」<sup>(6)</sup>するために設置されたのが皇居造宮審議会であった。戦後憲法のもとで、皇室に直接関係する事項が、法令に定めら

れた審議会で議論された例はほかにない。「国民」<sup>(7)</sup>の声を聞きながら建設するとの建て前が取られていたのである。しかし、結果からみると、権威と親しみやすさという二つの方向性のせめぎ合いのなかでは、前者に重きが置かれがちであった。

「皇居開放」と「皇居／宮殿再建」をめぐる議論が、現実の皇居造営のなかにどのように取り込まれ、一方で天皇と「国民」の距離を縮めるという理念がどう希薄化されていったのか。この章では、予備調査が始まって以降の議論の動向と、皇居造営審議会での議論を順番に検討していきたい。

#### 加納論文の登場とマスメディア論調

宮内庁による予備調査開始は、皇居／宮殿に関する議論を再び促す。予備調査のなかで宮内庁は、外国宮殿を実地調査し、五八年になって国会に報告するが、その報告後、特に社会党議員のなかから、宮内庁が進める再建計画に対して疑義を唱える声があがり始める。例えば、茜ヶ久保重光は「国民の中にはいまだに戦災住宅に、トタンのバラック住宅に入っておる者もある。非常に住宅不足である」と

指摘しながら、「天皇御一家をあの宮城という日本の国民にとつては古い固定した観念で見ているところのあの存在から離して、皇居そのものをもっと自由な場所に求めることが、私はこの際日本という一つの存在の中において有意義じゃないかと思う」と皇居移転を提案した「衆内閣58・3・18」<sup>(8)</sup>。また、開放論は、自民党議員の一部も唱えていた。そして、国会内での議論は、五八年二月一〇日に発売された『文藝春秋』一月号掲載の論文「皇居開放論」<sup>(9)</sup>によって、一般にも広がり、皇居開放論は五九年前半に大きな盛りあがりを見せる。

論文の筆者は、日本住宅公団総裁、加納久朗。江戸城は徳川幕府が封建時代に君臨するための城だと主張する加納は「皇居は日本の封建的専制政治のシンボルなのだ。こういう城に民主国家の象徴たる天皇がいつまでも居住しているのは、アナクロニズムという他はない」と強い言葉を使いながら皇居を「無用の長物」とまで言い切った。さらに、自動車の排気のために、皇居が「毒ガスの大煙幕の中」にあり、皇居の森も黒くくすみ、天皇の身体にも悪いと指摘。「空気のよい葉山の御用邸を現在の木造から近代的皇居に改築整備」するとともに、「八王子周辺の丘陵地帯に馬場、

ゴルフ、テニスといった運動場を完備した御用邸を新築し、各国使節とスポーツを通じて親善を図るべきだと提案した。

加納論文が注目されたのには、いくつかの理由があった。

第一に、房総半島の山を崩して、晴海から千葉県富津、晴海から羽田を直線で結んだ二億五二五〇万坪を埋め立てて新首都を建設する壮大な首都移転論とセットとなっていたためだ。<sup>(10)</sup> 加納は、最終的には新首都「ヤマト」に宮殿／御所を移すことを想定していた。首都自体を他の場所に移す初の本格的な遷都論のなかで、皇居移転を打ち出したことは目新しかった。第二に、加納の父は元上総一宮藩主の元子爵であり、皇室に遠慮する慣習を旧華族が打ち破ったと受け止められたこと、また、加納自身が吉田茂に近く経団連理事を務めるなど保守人脈の内側にいたことも、論文が注目された理由であった。第三に、皇太子婚約が発表され、皇室民主化への期待が一気に高まっていた時期に、論文掲載がぶつかったこともあげられよう。論文は、婚約発表直後『文藝春秋』が組んだ皇室特集の一本で、新聞広告には「皇居を開放せよ——民主天皇として東京の整形手術のため立退いてほしい」とのコピーがついていた。論文自体に

は「立退」きなどのあからさまな表現はない。しかし、移転先を具体的にあげて「移転」を促す論文は、「天皇がお生れになった皇居、いわば生家を追い立てるようなことを言うのは、情として忍びない」「読売58・12・21」というタブー意識を取り払う役割を引き受けたと言えよう。そして加納論文をきっかけに、新聞、雑誌、ラジオで開放論が盛んに取りあげられるようになる。

目立ったのは、『読売』による開放論キャンペーンである。皇太子婚約祝賀ムードのもとで、社説「58・12・21」が、「いまの皇居を開放されて、適当な地に新皇居をもとむべきだ」という説に賛成したい」と主張。翌年一月六日には「皇居開放をどう思うか——録音 街の世論」と題する路上討論会を東京駅前広場で行い、さらに同月一六日の紙面では「皇居はどうあるべきか」との見出しで一面大の紙上討論を展開した。これに刺激された新聞社系週刊誌も、『週刊朝日』が「皇居を開放しよう——新しい皇室作りへの世論、『サンデー毎日』が「菊のカーテン」の内側——宮内庁にもの申す」との特集を組み、開放論を煽る役割を果たした。<sup>(11)</sup>

## 移転先の議論

加納論文以降、皇居開放論は天皇の移転先を論じる具体的な議論に発展していく。先の『週刊朝日』の記事は、識者に取材し、①多摩丘陵（青梅）案（作家吉川英治）②青山御所（現在の赤坂御用地の一部）案（作家三浦朱門）③三浦半島案（評論家中島健蔵）④東京湾案（加納久朗）⑤富士山麓案（富士製作所社長田中清一）などをあげている。思いつきのレベルのアイデアも多いが、保守派を含めてさまざまな人たちが自由に論じていることが分かる。議論は、（一）皇居の全面開放論と、（二）一部開放論に分かれ、一部開放論のなかにも、（二の二）天皇の住居だけを皇居外に移して、皇居は縮小して公務の場だけを置くとする議論と、（二の二）宮殿と天皇の住居はそのまま皇居に置きながら一部を開放する議論があった<sup>(12)</sup>。

これに対して、宮内庁は、仮に皇居全体なり、住居を移転するには少なくとも二〇万坪が必要で新たな土地代だけで一〇〇億円を超える経費がかかる、国会など行事のたびに沿道警備が必要であるとの理由で、移転には反対であった<sup>(13)</sup>。『読売 59・1・7』。

その意味では、新たな土地取得が必要でない青山御所／旧大宮御所（ともに現在の赤坂御用地）への住居移転が有力な代替案であった。〈天皇は、皇太子夫妻と一緒に、近くに住むのが望ましい〉との理由が、皇太子婚約祝賀ムードのなかで共感を広げやすかったのだろう。この案に対しては、宮内庁は具体的な理由をあげて反論している。〈青山／旧大宮の御所「現在の赤坂御用地」は高低差が二〇メートルある傾斜地で、総面積一九万四〇〇〇坪のうち、傾斜地を除いた平地は五万坪しかない。うち半分は赤坂離宮である〉（その残りの土地に東宮御所を建設中で、秩父宮邸もあり、将来別の宮邸をつくりたい〉（一部の土地は都市計画道路で削られる〉（宮内庁長官宇佐美毅「参予算第一 59・3・26」）と主張した。わざわざ反論しなければならぬほど宮内庁が警戒する代案であったといえよう。

## 都心の交通問題

皇居開放論が注目された理由の一つに、皇居をめぐる交通事情の深刻化がある。五六年の警視庁調べでは、都内で最も交通量が多いのは、祝田橋交差点の九万六六九八台（七一九時）で、五八年秋にはこれが一三万〇〇五六台

まで増加していた「衆予算第一 59・2・26」<sup>(14)</sup>。皇居東側の大手町と祝田橋を結ぶ祝田橋通りは、都心の南北を結ぶ最短ルートであり、交通が集中する構造になっていた。「広大な皇居の地所が、放射線状に発達した東京都の中心に存在しているために、どれだけ交通網が阻害されているか、皇居周辺のものすごい自動車の洪水を一目見ればうなずける」<sup>(15)</sup>とみられていた。

都心の渋滞を解消するため東京都と首都圏整備委員会は五八年春までに首都における高速道路網計画を策定したが、渋谷から都心に向かう三号線と、池袋からの五号線が、皇居を迂回し、最短距離で結ばれていないため、「皇居に『遠慮』して回り道している」と指摘されていた「読売 59・1・5」。地下鉄の計画も、中目黒からの二号線（現日比谷線）が、皇居を避けて銀座、築地へと遠回りするなど、同様に、皇居を迂回していた「読売同」。これらが皇居の地下を通過できれば、画期的な都市計画が策定できると関係者は期待していた。

なかでも都市計画の研究者石原憲治がリーダーを務める日本都市美協会の動きが目立ってくる。同協会は五八年二月二六日、東京市政調査会との共催で、懇談会「皇居の

今後のあり方について」を開催し、議論に「石を投じた」。石原はその後も皇居開放について発言を続け、同年七月には首相岸信介らに対し「皇居および周辺のあり方についての意見書」を提出する。その内容は、都内の交通問題解決のために首都高速道路計画を再検討し、皇居下のトンネルなども考慮する、乾門から東京駅方面に抜ける補助線街路一二四号線を実現する、皇居東地区（旧本丸）<sup>(17)</sup>の国民公園化を至急実現する——などであった。<sup>(18)</sup>

#### 反発と世論

開放論の背景には、皇室の権威再編成への警戒がある。そのため逆に開放論に対する保守の側からの反発も出てくる。「おそれを知らず、はばかりを識らず、つつしみを忘れ、法の自由に狎れての乱言であつて、まさに日本弱体化占領政策の申し子の民主主義の病弊」（右翼思想家里見岸雄）<sup>(19)</sup>、「あれだけの長い歴史と伝統をもち現在も一国の象徴として憲法上も保証されている方のお住居を、どうしてそう簡単に取り壊してしまおうなどということがいえるのだろうか」（自民党衆議院議員額田弥三）<sup>(20)</sup>との意見である。ただし、一般の人たちに共有されたのは、むしろ、天皇への

親しみから発するもつと素朴な慎重論であつた。「皇居にふさわしい場所があれば、お移りになるのもよいが、邪魔だから移せ、という議論には賛成しがたい」(徳川夢声<sup>(2)</sup>)のような意見である。例えば、先に紹介した『読売』主催の路上討論会では、皇居移転論を述べた大宅壮一に対して、一般の参加者から「大宅さんの住んでいる町内会で大宅さんが気に入らないから出ていけといったらどうするか」との声があがつた『読売』59・1・7。

世論調査でも、皇居開放論よりも、反対論支持が優勢であつた。『東京新聞』が五九年一月上旬、都内の九九六人に、皇居のあるべき場所を聞いた調査では、移転反対論が多数を占めた(現在の場所でよい——五九・三%/皇居の一部に住む——二四・二%/都内の他の場所に移る——四・八%/都外に移る——三・九%/判らぬ、その他——七・八%)。記事によると、「現在の場所でよい」は主婦、農業、無職で強く、「移転」は学生、勤め人、自由業に多い。学歴が高くなるほど「移転」が増えたという『東京』59・2・2。『朝日』が同年二月に実施した調査(回答者二五四三人)でも同様に、「天皇陛下は新しいお住いに移っていたらいい、いまの皇居を国民に開放して、公園など

にするのがよい」という意見に賛成が二八%、反対が五四%であつた『朝日』59・2・26。マスメディアは、全面開放論、住居移転論から一部開放論までさまざまなバリエーションがある開放論を区別せずに論じる場合が多かつたので、世論調査の回答者が皇居開放の身を十分検討して答えたとはいひ難い。ただ、少なくとも全面開放や住居移転への共感は大きく広がつてはいなかつたといえる。『朝日』社説「59・3・26」は「皇居の全面開放、移転の問題が、それほど強い国民の要望であるとは言えないようである。恐らくこれには、皇居全体を数百年の歴史的記念物あるいは文化財と見る愛着が、国民の心の奥深く横たわっており、急激な変革は望まないという無言の判断がひそんでいると見てよからう」と書いた。

#### 審議会の設置

皇居造営について、宮内庁は早くから「審議会、協議会のようなもの」をつくつて、そこでの検討を経る手続きを明らかにしていた(瓜生「参大蔵58・7・2」)。皇室に関する戦後最大の公共工事を、政府の一存だけでは決められないとの認識を持っていたのである。『週刊朝日』による

と、五八年秋の段階では、首相が会長で、政界、財界、官界の代表者を入れた審議会が考えられていたが、行政管理庁から「宮内庁中心主義で、民間人が少ない……〔宮殿の〕敷地の選定までふくめて審議すべきだ」との意見が出て、審議会 of 構成を再考する必要がある<sup>(22)</sup>。結果的に、委員は二五人で、内訳は国會議員が一〇人（自民六人、社会三人、緑風会一人）、有識者が一五人である<sup>(23)</sup>。

委員が正式に発表された翌日、『読売』「59・5・15」は「任命された委員の顔ぶれにははつきりした皇居開放論者は入れられなかった」とあり、同紙社説「59・5・18」も「これでは、この問題に関する限り、結論は出たも同然であるといわれても仕方がない」と酷評していた。『大御所』ばかりを選んで若い学者などを無視した結果、思い切った皇居開放には踏み切れないことは明らかである<sup>(24)</sup>とみられていた。さらに、当時次の首相を目指すと思われる大野伴睦が互選で会長に選ばれた事実もまた（忠臣大野伴睦が会長とあつては、結論はおおよその見当がつく）と評されていたのである<sup>(25)</sup>。ただ、『いい分は十分いわしてもらいます』という委員もいたので、皇居移転論も飛び出すのではないか」との予想も一方にはあつた<sup>(26)</sup>。

宮内庁はマスメディアへの対策も行っていた。入江の日記「59・2・17」には、入江、前管理部長（当時は東宮大夫）鈴木菊男、管理部長三井安彌、管理課長本郷定男、東宮侍従黒木徒達が、『朝日』編集主幹の笠信太郎、論説委員長荒垣秀雄らと皇居内のパレス国際乗馬クラブで懇談した事実が記されている。「この頃の皇居開放その他のさがしきもあるし一度懇談したいといふことになったもの。みんな大変喜んでくれて非常に有益だった。荒垣さんは相当地酔つて帰つていつた」と書かれた一節である。『読売』のキャンペーンに対して『朝日』社説ははつきりとした開放論を展開しなかった。宮内庁が『朝日』だけに根回しを行つたのか、あるいは、他の新聞社にも同様な懐柔を行つていたのかは不明である。ただ少なくとも皇居開放論に神経をとがらし、『朝日』の編集幹部に接触を図つたことは確かである。また、審議会委員のうち三人（笠のほか、『毎日』社友阿部眞之助、『読売』副社長高橋雄紘）は、三大紙の幹部で、これが最大のマスメディア対策であつただろう。

審議会は一〇月までに本会議七回（六月五日、六月一日、七月三日、七月一七日、八月二七日、九月一七日、一

○月八日）があつたほか、「皇居周辺の計画道路及び皇居東側地区に関する小委員会」（以下、「道路・東地区小委員会」）が三回（七月二二日、八月一四日、九月一六日）、「皇居の規模、様式及び経費に関する小委員会」（以下、「規模・様式・経費小委員会」）が二回（九月七日、九月一五日）、「皇居造営審議会答申案起草委員会」が一回（一〇月二日）開かれた。答申が出るのは、最後の本会議があつた一〇月八日である。以下、四カ月の議論のポイントを検討していく。<sup>(27)</sup>

#### 住居移転論の否定

審議会が一番注目されたのは、全面開放論、住居移転論に対する対応である。この議論が行われたのは、本会議第三回であつた。一回目は首相らの挨拶、二回目は皇居見学であつたので、実質初回であるこの第三回が、最大のヤマ場となつた。

この会議で大野は「皇居造営については、何といつても、位置をどこにするかが根本であつて、世論もほとんどその問題に集中されておりますから、まず位置についての審議から始めては、いかがでしょうか」と切り出し、最初に文

化財保護委員会委員長（元侍従次長）河井彌八が「宮殿としては、戦前のあの西の丸広場が適当だと思います」と、明治宮殿があつた西の丸に宮殿を再建する宮内庁原案に全面賛成して口火を切つた。その後、発言が続かなかつたため、大野が出席委員全員の発言を促した。そのなかで新宮殿を西の丸に再建する案への異論は出ず、住居についても「お住居だけを別の場所に――京都その他の場所に――移転することとは、もつての外と思う」（自民党衆院議員松永東）のような強い移転反対論が出た。しかし一方で、住居移転論に共感を示す委員が三人いた。「お住居については、別個に考えるべきであると思います」（社会党衆院議員原彪）、「天皇御一家のお住居をどこにするかは、まだはつきり考えてない。検討の余地があると思います」（日本建築学会会長二見秀雄）、「お住居は、果して現在地以外に可能性がないかという問題は残る。それは、交通問題とも引つかかっています」（笠）と述べた三人である。いずれも曖昧ないい方ではあるが、弱い住居移転論であつた。

大野はしかし、意見が一巡したところで次のように発言した。「本日委員は、四人の欠席がありますが、出席者の意見は、大同小異、皇居はやはり現在の地点にあるべしと

するのがほとんど全員と存じます。位置は、現在の場所と決定してよろしゅうございますか」。宮殿と住居を分けて審議する慎重な進め方もあったようにみえるが、発言の後に「異議なし」の声があがり、続いて大野が「では、さように決定しました」と発言し、議は決したことになっている。世論の盛りあがりを前に決定を急いだのだろうか。ともかく基本的な答申の柱があつてなく決まった。この回を欠席した社会党参院議員佐多忠隆が次の本会議（第四回）で、「皇居の位置については十分審議の上決定したいと会長は最初に発言されたのに、前回一回で決まったように承るが、もつと慎重に審議を重ねてもらいたい。第三回会議の配布資料をみますと、皇居の現状維持論より、むしろ開放、移転論の方が多いように判断されます。そこで、この問題については、いろいろ関連するところが多いから、誰か代表的な人の意見をこの席上で聞いた上で決定してはどうですか」と食い下がった。しかし、大野は「ただいまの提案は、むしろ、遅れた感がある。このことは、ほとんど全員の賛成を得て決定したのだから、改めて審議するには及ばない。一事不再理の原則でやりたい」と、手続き論を盾に却下した。西の丸への宮殿再建、住居は御文庫に併

設して——とする宮内庁原案がここで追認されたのである。

#### 社会党の対応

前述したとおり、政府、宮内庁側が慎重に委員を選んだ面は確かにあった。また、マスメディアへの根回しのほか、野党対策も行われていたようだ。社会党委員長の鈴木茂三郎によると、五八年夏、首相の岸から「東宮御所の新築に続いて新しい皇居を造営することになった。ついては天皇が現在、いかにお住いに不自由されているかを鈴木さんにも見て頂きたい」との話があり、「新皇居の建設計画なり予算に社会党が反対しては困るという考慮からのようにみえた」「朝日59・8・16」という。結局、鈴木は皇居視察は実現しなかったが、他の社会党議員に対して理解を得る努力も行われていたのであろう。三人の社会党出身の委員のなかでは、右派の杉山元治郎が「環境的にも、歴史的にみても現在の場所が適当と考えます」（本会議第三回）と宮内庁原案に全面賛成しているのが目立つ。

そもそも社会党は、皇室に関する方針が定まっていなかった。国会論戦では都市交通論の立場から全面開放論を説く左派があり、「国民」と天皇との距離を縮めるために一

部開放を主張する右派もいた。社会党は三人の審議委員を自党内部で選べる立場にはあったが、衆院は副議長経験者の杉山と原、参院は議運副委員長の佐多を選び、これまで国会で論陣を張ってきた議員を、審議会委員にする選択をとらなかった。左派出身の鈴木自身は「皇居をこのような姿のままで維持しようとする考え方に対しては強いふんまを覚えずにはいられない」「朝日同」と書いていたが、それが党論とはならず、党内の意見を統一できなかった。

#### 皇居附属庭園

全面開放論と住居移転論があっけなく消えた後、焦点は一部開放論の扱いとなった。つまり、現在の皇居東御苑開園につながる東地区の扱いをめぐる問題である。

国会議論のなかでも〈皇居が広すぎる〉（一部を一般に開放した方がよい）という意見が出ていたが（例えば、社会党田畑金光「参内閣58・4・8」、宮内庁自身も早い段階で東地区開放を念頭に置いていた。瓜生は「東地区は」陛下のお住いから幾らか離れておりますし、公けの行事のところからも離れておりますから、あそこはもつと気楽に入っていける利用方法を考えていいんじゃないか」

「衆大蔵、58・7・3」、「それ「開放」によって皇室と国民との親愛感も一そう深まり、それが国のためでもある」「参内閣59・3・24」と答えている。答弁を受けた新聞も宮内庁が東地区を開放する意向であると報じており、審議会での議論が始まる前から東地区開放は既定路線であった。

審議会でも「旧本丸を公園として早く開放の実をあげるならば、世間の誤解もとけて、皇居の性格がはつきりするでしょう。そうすれば西の丸に新皇居を造営しても、世論は、賛成すると思います」（東京市政調査会会長前田多門、本会議第三回）との意見が出ており、東地区開放は世論からの風当たりを防ぐための方策と認識されていた。宮内庁長官の宇佐美自身、「東地区は……世論その他を考えると……「書陵部、楽部、厩舎その他を」近き将来に整理して、国民が利用できるようにしたい」と述べている（本会議第三回）。宇佐美発言にもあるとおり、問題は、東地区にある書陵部などの建物の扱いであった。審議会のなかでは、特に河井が「宮内庁もこれからもつと多く土地が要るでしょう。祝宴場、官舎その他用としていろいろ必要があるので、ではなからうか。お住居にもスペヤが要るでしょう。こう申せば、世論の反撃をうけるかも知れないが。とにかく皇

室の持つべき土地を総合的に検討すべきです」(道路・東地区小委員会第一回)、「次長「瓜生」は、「東地区」開放論に傾いているようですが、遠慮しなくてもよい。皇室本位に考えてよいではないかと思えます。世間から批判はありましようが」(道路・東地区小委員会第二回)と、東地区開放に否定的な意見を強く主張していた。河井はさらに、すでに宮内庁の手を離れている皇居前広場や旧近衛師団跡(北の丸地区)をも「清浄にして宮内庁の所管のもとにしたい」と発言していた(本会議第五回<sup>29</sup>)。他の委員で、東地区開放に異論を唱えた者はおらず、〈世論よりも宮内庁の都合を〉と唱えた河井の意見は特異なものであったが、しかし、東地区を「宮内庁所管」としたかった宮内庁には強い追い風になったようにもみえる。

これまで論じてきたように、東地区の土地の大半は敗戦直後、宮内庁の所管を離れた土地であり、「公園」化はその時に決まった。それが呉竹寮などの移転の絡みもあり、「緑地」あるいは「中央公園」の指定が、中途半端のままに放置されていたのであった。

皇居造営の国会議論のなかで、大蔵省は、東地区の一般財産を、宮内庁公用財産に所管換える方針を明らかにし、

宮内庁も、その方が管理は行き届くと述べている「衆大蔵58・7・3」。そして、宮内庁は、東地区全体を宮内庁所管に戻し、「ある程度国民が入れるよう」(宇佐美、道路・東地区小委員会第一回)な限定的な開放を考えていたのである。

構想に対して、「宮内庁所管の庭園にするという意味は」「宮内庁の使用を主体にするか、一般の利用を主体にするか」(阿部、本会議第五回)と、疑問を呈する声も出たが、最終的には東地区に関する答申は次のような表現になった。

皇居東側地区は、宮内庁が一括所管し、皇居附属の庭園として整備し、宮中行事に支障のない限り、原則として一般に公開する。／同地区内の大蔵省所管の普通財産は、宮内庁所管に移し、同地区と厚生省所管の公用財産との境界の不合理な点は改定を行なう。<sup>30</sup>

東地区については、児童遊園地にしたらという意見があったほか、プロ野球の球場建設の提案まであったという<sup>31</sup>。こうした提案を退けたうえで、パブリックの場所であることを示す「公園」という言葉をもあえて避け、「皇居附属

庭園」をつくると決めたのである。

これらの動きについて、当時、批判が起こったわけではない。『毎日』「61・4・6」が「東地区のうち半分近くは大蔵省の普通財産だったが、去年末宮内庁に移管されたので、宮内庁は“地主”の立場を回復……この土地は「昭和」二十一年に天皇家の財産税の一部として物納されたもので、十五年ぶりに宮内庁の手に戻った」と皮肉ったくらいである。<sup>(32)</sup>

そして、東地区は六八年、皇居東御苑として「開放」された。開放とは、所管を宮内庁から移したうえで「国民」の利用に供するのが、そもそもの理念であった。その意味で、皇居東御苑開苑は、かなり限られた意味での「開放」といえるだろう。

### 皇居と道路の問題

次に大きな問題となったのは、皇居造営と都市計画との関係である。実は、河井は、乾門から皇居内部を通り東京駅方面に抜ける補助線街路一二四号線や、東地区の緑地／中央公園指定の法的根拠に疑問を投げかける発言を、審議会で繰り返していた。敗戦直後の宮城は世伝御料であり、

枢密院諮詢を経ない都市計画決定が有効であるのかとの問題提起である。財産税としての土地移管に関しては、四七年二月に出された皇室令で「財産税法及附属法令ハ御料ニ関シ之ヲ準用ス」と法的な根拠が確保されていたが、都市計画法上の道路と緑地指定は、確かに法的根拠があいまいだった。宇佐美は「当時は、いずれも「宮内省と戦災復興院、東京都との」協議はなかつたようです」と事実と異なる説明をしたうえで（本会議第二回）、法的根拠については建設省と内閣法制局の助けを求めた。審議会に出席した建設省事務次官の柴田達夫は、「当時、一般法令は、皇室令に明記しないかぎり御料に適用がなかつたので、都市計画法を御料に適用させるためには、皇室財産令を改正すべきであったが、当時の情勢から皇室財産令の改正が可能であつたかどうかわかりません……告示するについて完全無欠の手續が行われたとは思われません」と河井の主張を認めた（道路・東地区小委員会第一回）。河井には、指定が必ずしも有効でないと明らかにしたうえで、東地区開放や補助線街路一二四号線の実施を牽制する意図があつたのだろう。

一方、補助線街路一二四号線については、自民党衆院議員星島二郎が「乾門―坂下門は、地下道なら賛成です」

（本会議第四回）と発言したように、委員のなかにも期待があった。さらに東京都は、審議会のなかで一二四号線がないと「交通問題が解決できません」（東京都建設局技監佐藤九郎、道路・東地区小委員会第二回）と強調した。首都高速道路計画で乾門外に出入口（現在の代官町出入口）が計画されていたが、東京都は、これは補助線街路一二四号線と結合するのが前提で、同線を朝夕のラッシュ時だけ通行させても「実質的效果は相当あがる」と説明したのである（東京都都市計画部長山田正男、道路・東地区小委員会第一回）。

これに対し、河井は、補助線街路一二四号線が、蛤濠を壊さなければならぬ懸念を根拠に「文化財保護委員会としては不適当と認めます」と発言。他の委員からも、交通上の効果や警備上の問題の疑問が出された（道路・東地区小委員会第二回）。結局、首都高速道路の完成後の交通事情に応じて検討するが、「しばらくは取り止め」（前公正取引委員会委員長長沼弘毅、本会議第五回）との結論になった。答申上での表現は「将来更に慎重に検討すべき」である。

首都高速道路の問題も同様に議論になった。前述したと

おり首都高速道路は皇居を迂回する予定だったが、半蔵濠付近では濠の法面をオープンカットで切り開き、濠の景観が大きく変わる計画だった。これについても、濠の景観を壊すことに対して疑義があり、答申では「景観の保持等につき特に十分の配慮をする」という表現が加わった。これを受け首都高速道路公団は、後年、半蔵濠付近の計画をトンネル式に変更したのである（読売61・11・11夕）。

どちらの場合も、審議会は、都民の交通の利便性や工費といった側面よりも、景観と文化財の保護を理由にして、皇居の静寂さや尊厳を優先させる役割を担った。

#### 審議会の役割

審議会は五九年一〇月八日、首相宛ての答申を出して任務を終えた。「国民と天皇を近づける」という面で、審議会が果たした役割もないとは言えない。一例をあげれば、宮内庁原案では、宮殿前に一般参賀を行う広場をつくる予定はなかった。しかし、〈国民との接触という点からも宮殿前に広場を〉との声があがり（規模・様式・経費小委員会第一回）、答申には「宮殿周辺の空地をなるべく広くとり、国民参賀等もここで行なえるならばよりよいと考

えられる」とする表現がつけ加わった。消極的な表現であったが、宮内庁はその後、宮殿の建物を西側にずらす配慮で場所を確保して、宮殿前に一般参賀用広場を設置したのである。審議会委員たちは「国民」との近さという側面を無視してはいなかった。

しかし、審議会はやはり、宮内庁原案を追認する面が大きかったし、それ以上に、遠慮がちな宮内庁の尻を叩き、尊厳のある皇居、ナショナルなシンボルとしての宮殿をつくりあげる一翼を担ったといえる。

費用の面でみても、宮内庁は一貫して総額の見積り発表をためらっていたが、これは世論からの批判を恐れたためだった。しかし、審議会では「日本の象徴であられる陛下の使用される宮殿でありますから、経費の枠にとらわれることなく、世界に稀な立派なものを造つたらよいと思います」（自民党参院議員大野木秀次郎、規模・様式・経費小委員会第一回）との発言もあり、答申には「財政事情を考慮すべきはもち論であるが、皇居造営の本旨を達成するのに遺憾のないようにすべきである」という表現が加えられた。さらに、答申は、宮殿内部は日本特産材を多く用い調度品も国産にして「清楚で日本的な意匠」を実現すべきだ

と結論づけた。審議会委員たちの多くが、皇居／宮殿を、日本を表象する空間／建造物であると強く意識していたのである。

### おわりに

敗戦直後、宮内省は旧本丸（東地区）開放によって、天皇が濠に囲まれた「城」に住む印象を払拭しようとした。天皇は「国民」と隔絶した存在ではなく、「国民」と同じ地平に暮らしているというイメージは、占領軍に対しても、「国民」に対しても、アピールする価値があるものだったからである。これを受けた戦災復興院と東京都は旧本丸を緑地指定し、宮城内道路を計画した。宮内省も、都市計画関係当局も、宮城の脱権威化、フラット化を目指す点では一致しており、それは民主的な天皇制を期待する「国民」も望むものであった。しかし、天皇制の行く末が不透明だった敗戦直後を過ぎると、脱権威化の必要性は薄くなり、逆に、皇室の権威再編成が志向されるようになる。そのため、都市計画決定された緑地（中央公園）化や、道路計画はたなざらしにされ、開放の理念は忘れられがちになった。

そして、独立回復、国連加盟を経て日本外交の活発化が予想されると、その儀式の場としての宮殿、あるいは、日本の威信を表象する皇居が注目される。さらに経済復興により予算的に皇居造営の実現可能性がみえてくると、実際の造営が政策アジェンダに上る。一方で、皇太子妃ブームのなか皇室民主化の期待が再び盛り上がり、とうとう、東京の交通問題が深刻化するにしたがって、もう一度、皇居開放を望む世論が起ってくる。そして、皇居開放への世論を汲みながら、国家威信を表象する空間としての皇居の造成に最終的な道筋をつけるためにつくられたのが皇居造営審議会であった。

皇居開放とは、天皇が「国民」の近くにいることを示して、その親しみやすさをアピールするためのものであり、皇室に利用が限られていた土地の所管を宮内省（庁）から移すことがその実践であった。しかし、昭和三〇年代の政府と宮内庁にとって、皇居開放の理念と実践は二次的なものとなり、国家の威厳を高めるものとしての皇居／宮殿こそが、まさに必要とされるようになっていた。二重の意味があった皇居という空間にとって、国民とのつながり強化という側面は副次的、言い替えれば、優先順位が最も高い

目標ではなくなっていたのである。そのため、皇居造営のなかで整備されることになった皇居附属庭園（皇居東御苑）では、「公園」の名称を避けるとともに、宮内庁が所管しながら一般の利用にも供する「限られた開放」が実現しただけであった。

最後に、本稿の考察対象時期以降、実際の皇居造営のなかで、皇居／宮殿の権威化の動きのいくつかを紹介し、造営された皇居が「国民」と遠い存在になっていくことを確認したい。

（二）本文でみたとおり、旧本丸（東地区）には敗戦直後、民間の乗馬クラブとテニスコートがつくられていたため、皇居附属庭園造成にあたって宮内庁は双方に立ち退きを求めなければならなかった。難色を示したのは、テニスコートを運営していた任意団体のテニスクラブである。「大事にコートを育ててきたのに……一部でも残してやろうという愛情が少しもない」「読売62・4・9」と主張するクラブ側は、東京都を相手取って閉鎖の一時取り止めを求める仮処分申請まで起こした。<sup>(33)</sup>結局、すぐに取り下げられた「読売62・5・2」が、敗戦後の開放の過程でできたテニスコート、つまりは開放の成果は、ひそかに取り消さ

れていたのである<sup>(34)</sup>。また、東地区には、内閣文庫、内閣賞勲部などの他省庁の建物があった。特に気象庁は地震計室を置いていたため「明治以来この場所でデータを集めてきたのだから移転は困る」と困惑し、「全部皇居の外に移ってもらいたい」としていた宮内庁と意見が食い違っていた「毎日61・4・6」。しかし、最終的にはすべてが立ち退くことになる。「開放」の名のもとに、宮内庁は皇宮警察とともに、他省庁の東地区利用を排除していったのである。

(二) 皇居造営審議会答申の後、宮内庁次長の瓜生は、皇居の地下に道路を通す可能性について、地下水への影響、経費、交通面での効果の点から否定的に述べるようになる「衆大蔵60・4・14など」。審議会前は、「決してこれを反対はしていない」と地下自動車道を否定していなかった「衆大蔵58・7・3」から、方針転換である。以後今日にいたるまで皇居地下に道路や鉄道が通されたことはない。交通の利便性より、皇居の静穏さが重要だったのである。が、審議会答申を盾に、宮内庁はこうした主張を貫けるようになった。

(三) 岸を継いで首相となった池田勇人は天皇の還暦を記念して皇居周辺の整備を指示し「朝日61・4・29」、結

果的に旧近衛師団跡の公園化が進められる（現在の北の丸公園）「読売61・5・18」。池田は、東京都への移管が前提となっていた北の丸公園整備について、「天皇の還暦をお祝いしてつくられたものであるから、当然国立とすべきだ<sup>(35)</sup>」として、国の直轄事業として進めるように指示「朝日63・5・21」。さらに、皇后の還暦についても、池田の発意で東地区に音楽堂が建設されることになった（現在の桃華楽堂<sup>(36)</sup>）。一般の利用が想定されていない皇族専用の建物を東地区に建設することは、皇居造営審議会では議論されておらず、内閣が主導した施策であった。

(四) このような経過を経て宮殿や皇居附属庭園（皇居東御苑）が完成した時には、「国民」と天皇の距離を縮めるといふ皇居造営の理念の一方は、ほとんど忘れられていた。そして、新しい宮殿の「国民」への初披露となる一九六九年の新年一般参賀で、皇室と「国民」の距離がさらに広がる事件が起きた。のちの映画『ゆきゆきて、神軍』で知られるようになる奥崎謙三が、宮殿のベランダに立った天皇に向かって約一五メートルの距離からパチンコ玉を放った出来事である「朝日69・1・3」。そのため、翌年の新年一般参賀からは、天皇らのお立ち台はガラスで覆われるよう

になった「朝日70・1・3」。このガラスは「皇室と国民の間を隔てる距離は計り知れない」「朝日80・4・28」と評されたこともあり、まさに「国民」と天皇の間のみえない壁となったのである。

敗戦後「国民」と同じ地平のフラットな空間を目指していた皇居は、一連の造営事業の完了によって、再び「国民」から隔絶した一段高い空間と受け取られることが多くなっていた。以後、皇居開放が議論になること自体も少なくなり、皇居は国民が論じる対象でさえなくなるのである。

## 注

- (1) 前掲『宮殿造営記録・解説編』一七頁。
- (2) 筆者がみつけた「新皇居の構想試案」は全一〇頁。東京市政調査会市政専門図書館蔵『皇居造営審議会関係資料』のなかに含まれている。
- (3) 同右。
- (4) 皇居造営審議会「皇居の規模、様式及び経費に関する小委員会」第一回会議事録『皇居造営審議会関係資料』。
- (5) 前掲「新皇居の構想試案」。

- (6) 「皇居造営審議会第一回会議における内閣総理大臣の挨拶」『皇居造営審議会関係資料』。

- (7) 審議会は総理府設置法を改正して設置された。皇室に関する諮問機関は、二〇〇四—〇五年の「皇室典範に関する有識者会議」があるが、総理大臣の私的諮問機関であった。
- (8) 宇都宮徳馬が一般論としての皇居開放論（『説売54・8・30』など）を、川崎秀二が一部開放論（衆予算第一59・2・26）を唱えていた。

- (9) 加納久朗「皇居開放論——皇居を移転し中央公園として開放せよ」『文藝春秋』（一九五九年一月号）二五二—二五六頁。

- (10) 加納の案は、さらに洗練した形で、産業計画会議編『東京湾2億坪埋立についての勧告』（一九五九年）としてまとめられた。[http://cripi.denken.or.jp/intro/matsunaga/recom/recom\\_07.pdf](http://cripi.denken.or.jp/intro/matsunaga/recom/recom_07.pdf)

- (11) 「皇居を開放しよう——新しい皇室作りへの世論」『週刊朝日』（一九五九年一月一日号）七—一五頁。「菊のカーテン」の内側——宮内庁にもの申す」『サンデー毎日』（一九五九年一月一日号）一一—一九頁。

- (12) そのため、当時の文脈で一部開放論とだけいった場合（二の二）なのか（二の二）なのか曖昧だったし、住居移転論といった場合も（一）を示すのか（二の二）を示すのかはつきりしないことが多かった。本稿では、（一）を全

- 面開放論、(二の一)を住居移転論、(二の二)を一部開放論と区別する(引用を除く)。
- (13) 東京百年史編集委員会編『東京百年史』第六卷(東京都、一九七二年)九三〇—九三二頁。
- (14) 警視庁交通部長富永誠美の答弁。
- (15) 前掲「菊のカーテン」の内側——宮内庁にもの申す——一七—一八頁。
- (16) 例えば、『朝日』論壇「59・3・12」に、石原は「一部を記念公園に……皇居のあり方について」を寄稿している。
- (17) 昭和三〇年になると旧本丸は、東地区(あるいは東側地区)と呼ばれることが多くなったため、昭和三〇年代の旧本丸は「(皇居)東地区」と表記する。
- (18) 石原憲治「皇居開放と都心開発問題」『都市問題』第五〇巻第一一号(一九五九年一月)五五—五六頁。
- (19) 里見岸雄「ちよつと待て!皇居開放論」『経済時代』(一九五九年六月号)一八頁。
- (20) 額額弥三「聞き捨てならぬ皇居開放論」同右二五—二六頁。
- (21) 前掲「皇居を開放しよう——新しい皇室作りへの世論」八頁。
- (22) 同右。
- (23) 委員は次の通り。【衆院議員】大野伴睦▽益谷秀次(後に星島二郎と交代)▽松永東▽林譲治(以上自民)▽原彪▽杉山元治郎(以上社会)【参院議員】大野木秀次郎▽草葉隆円(以上自民)▽佐多忠隆(社会)▽村上義一(緑風会)【有識者】文化財保護委員会委員長河井彌八▽東大学長茅誠司▽日本建築学会会長二見秀雄▽東京都知事東龍太郎▽「毎日」社友阿部眞之助▽都市計画協会会長飯沼一省▽経団連会長石坂泰三▽東大名誉教授内田祥三▽日本道路公団総裁岸道三▽早大教授島田孝一▽「読売」副社長高橋雄豺▽国立公園協会理事長田村剛▽前公正取引委員会委員長長沼弘毅▽東京市政調査会会長前田多門▽「朝日」論説主幹笠信太郎。
- (24) 「まかり出た新皇居の構想」『世界』(一九五九年九月号)一八九頁。
- (25) 同右。
- (26) 「国民の中に降りて来た:新・皇居の青写真」『週刊サンケイ』(一九五九年十一月一日号)一二三頁。
- (27) 以下、審議会の議論は、東京市政調査会市政専門図書館蔵「皇居造営審議会関係資料」のなかにある各会議の議事録に依った。本文では(発言者、会議名)として出典を略記する。
- (28) 本会議第三回に配布された参考資料に「皇居造営等に関する世論」があり、それまでの主な議論がまとめられている。『皇居造営審議会関係資料』所収。

- (29) 同じ頃、旧近衛師団跡（北の丸地区）には、宮内庁大膳職のアパートが建ち、皇宮警察の寮も計画されていた。公園計画がある場所に、皇室関係職員の住居が建設されることに批判もあった。前掲「皇居を開放しよう——新しい皇室作りへの世論」一一頁。
- (30) 以下、審議会の答申本文は、以下の公文書を利用した。「皇居造営についての皇居造営審議会の答申について」国立公文書館蔵「内閣公文・国政一般・皇室・その他・A 29—1・第一巻」。
- (31) 高尾前掲書六二頁。
- (32) ただし、皇室用財産に正式に移管されたのは一九六四年であった。「国有財産法第13条の規定に基づき国会の議決を求める件」国立公文書館蔵「内閣公文・国政一般・皇室・その他・A 29—1・第一巻」。
- (33) 東京都を相手取ったのは、宮内庁が都に貸し、それをテニスクラブが使用する形になっていたため。
- (34) 乗馬クラブからは東京オリンピックまで使用できるようにと申し出があり、これも庭園造成の障害になった（高尾前掲書六三頁）。
- (35) 前掲「言葉のまやかしの響き——皇居東御苑の開放」一一頁。
- (36) 同右。